



## 赤い土、白い砂、 青い陶器

菊田 悠 (きくた はるか)

北海道大学スラブ研究センター研究員

### 赤い土の尊さ

陶芸において大切なものは何か？それはまず、陶土だろう。リシトンの地下1メートル付近には良質の陶土があり、焼くと赤くなることから「赤い土」とよばれている。

### 白い砂に描くもの

こうして大切に成形した「赤い土」の表面には、リシトン近郊の川から採った「白い砂」を塗って焼く。「白い砂」は石英で、赤い器体もこれで覆うと白く焼きあがる。その白色の地があるからこそ、コバルトブルーの絵が映えるのだ。

町でいちばんの陶工といわれた故コミーロフ親方は、「この土を手にとって仕事を始めるときには『神の御名において(ヒスミツラーヒツラフモニーツラヒム)』と言わなければいけないよ」と語っていた。その理由は、「赤い土」は人間からできているからだという。親方曰く「この世にはとても古い歴史があつて、人が何人も来ては去り、土に還っていったらう。土にいったらうのような人間が眠っていたのが、偉人だったか泥棒だったか誰にもわからない。その土を陶工が何回も細かくして陶器にしてきた。だから『神の御名において』と言って仕事を始めなければいけないだよ」「赤い土」への深い尊敬を感じることはだと思ふ。

親方はこうも語っていた。「たとえ陶器が失敗作になってしまつても、怒つてはならない。陶土に悪口を言つてはいけない。それはきつと悪い人間の土だったからで、悪い人間は陶器になることも嫌がつたのだから、仕方ないのだ」。

ただしもうひとつの説もある。ウスベキスタンでは客へのもてなしにピラフを料理することが多い。大皿で客にピラフをふるまつた後、ピラフの下から見えてきた水差しの絵を見て、主人が「では汚れた手を洗ってください」と水差しを出すのを忘れないように、というのである。冗談のようでもあるが、日本で寿司は手で食べた方がおいしいと言つようにウスベキスタンではピラフは手で食べるのが王道だから、食後に油まみれになつた手を洗う水差しは確かにありが

### 青い陶器の町

ユーラシア大陸の中央部、ウスベキスタン共和国の東部には青い陶器の町がある。その名はリシトン。古くから陶器の産地として有名で、一説では一〇〇〇年近くむかしから陶芸がおこなわれていたという。現在も約三万人の人口のうち数千人が陶芸関係の仕事で生計を立てている。白い下地に草花や鳥などの絵柄を鮮やかなコバルトブルー

の顔料で描いたものが、リシトン陶器の伝統的なスタイルとしてよく知られている。

町には腕の良い親方たちが八〇人ほどいて、この伝統にそれぞれの個性を加えたユニークな製品を生み出している。彼らのあいだでは親方と弟子の密接な徒弟関係があり、陶芸に関するさまざまな物語が語り継がれてきた。その一端をご紹介します。

らだ。

だが、コミーロフさんの遺志を継いだ親方たちは青い陶器の伝統を絶やすまいと努力している。彼らは陶芸を単なる生計の手段としてではなく、祖先から伝えられてきた貴重な技能ととらえているのである。コミーロフ親方は「手工業のな

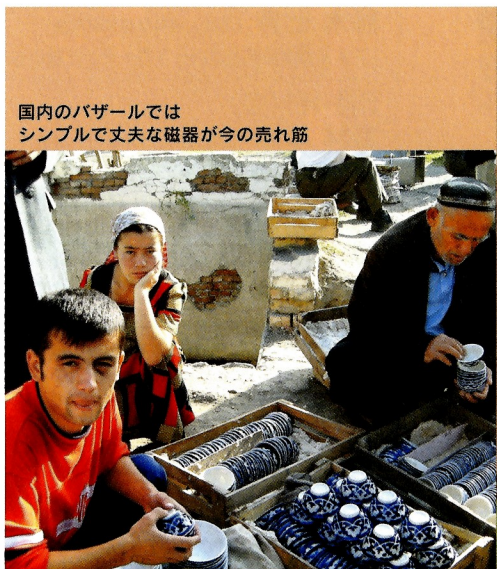
かでも、人間の生活の始まりからあるのがこの陶芸に違いない。裸で歩くことはできても、食事とそのためのお器は欠かせないからだ」と言っていた。そして「清らかなものだけを飲み食いとすると魚も、陶工が落としたパンのかげらならば喜んで食べるという。人の体だつた土を

成形して焼く陶工は、そこまで清らかで正しく生きなければならぬ」ととだ。陶芸は繊細な職能なんだよ」と弟子たちに教えていた。この強い誇りこそが、今もリシトンの青い陶器作りを支えているのだらう。

花もよく描かれる。これはこの世の美しさを表現したといわれる。十字の各端に花を添えた文様は、世界の東西南北の地域にも、それぞれにふさわしい美しさや暮らしがあることを意味するのだという。「昔の陶工はリシトンから大して遠くまで行かなかつたかもしれないが、それでも工房で世界の美に想いを馳せて花を描いたのだ」と親方は言っていた。また、裏返しの小刀という変わったモチーフもある。それは「刀を置いた状態」つまり平和を表現しているのだという。さまざまな勢力が栄枯盛衰を重ねたこの地域で、陶工のような職人や一般庶民は、平和の大切さを切に感じていたことだらう。

### 陶工の誇りを胸に

リシトン陶芸は今、大きな変化の時代を迎えている。一九九一年に旧ソヴィエト連邦からウスベキスタンが独立し、それまでの社会主義から資本主義的な市場経済へと転換したことで、陶工間の競争が激化しているのである。これにより親方と弟子の徒弟関係も一部では崩れつつある。また、地元の「赤い土」を用いた青い陶器ではなく、遠くから運んできた別の土で磁器を焼く人も増えている。手描きで繊細な陶器よりも、シンプルな磁器の大量生産のほうが手っ取り早く稼げるか



国内のパザールではシンプルで丈夫な磁器が今の売れ筋



ユルダシェフ親方は  
コミーロフ親方の一番弟子



自慢の作品を前に

親方と弟子たち



在りし日のコミーロフ親方  
(1928-2003)

